

回覧														
----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

アクティブ長洲小

長洲町立長洲小学校だより

令和2年9月11日 第8号

文責 校長 川富 一弘

台風9号・10号襲来！学校が避難所に

8月には発生しなかった台風が、9月に入り相次いで発生し、2つの台風が連続して九州西側を通り抜けていきました。9号については、午前中の授業で打ち切り一斉下校し、10号については臨時休校となりました。特に10号については、過去最大級とか誰も経験したことのない暴風雨につき命を守る行動を、とこれまでにない警戒を要請する報道がっており、これまでにない対策をとられたご家庭も多かったことと思います。

学校も週末にかけて倒れそうなもの、飛ばされそうな物はすべて倒したり、屋内に入れたりしました。また、当初は避難所の指定を受けていなかったのですが、各種報道を受けて、想定以上のことを考えるべきとの判断から、いつでも開放できるように教室内の机と椅子を後方に寄せたり、断水に備えているいろんな場所のいろんな容器に水を溜めたりしていました。結局、金曜日に教育委員会より指示があり、避難所として学校を開放することになりました。

6日、日曜の正午から40名以上の避難者が来校され、密を避けるため行政区ごとに分けられた教室へ入られました。スペースは確保したとは言え、学校はそもそも避難所としての機能を備えているわけでもなく、安心して避難できる空間とはとても言いがたい状況でした。周囲はほとんどがガラスで覆われていますし、停電や断水対策がとられている訳でもありません。ただ倒壊の心配がないのと雨風は凌げる、それが学校の避難所としての現状です。きっと避難者の皆さんは、見えない自宅への心配と、避難所での落ち着かない時間で、十分な睡眠もできなかったのではないかと申し訳なく思いました。そんな中でしたが、台風はなんとか大きな被害もなく無事通り抜けていきました。

今後は、この経験を生かして、避難所としての資材や機能を備蓄しておくことや運営面での準備調整を教育委員会とともに進めていかなければならないと痛感しました。

防災への意識を高めましょう

今回の台風10号については、直前の9号の影響で海水温が下がり、接近時には予想よりも勢力が弱まったことが被害を最小限に抑えられた原因とのこと。確かに予想よりひどくなかった、たいしたことなかった、との印象を誰もがもったかもしれません。各ご家庭でも最大の警戒と対策をとられたことでしょう。ホームセンターでは、水や非常食を買い求める人が多くおり、電池や懐中電灯も棚からきれいになくなっていました。当然行き渡らなかった人もいたでしょう。人の心理が、報道や周囲の人の動きによって一気に高まったことが考えられます。

しかし、こうした防災グッズは、普段から用意していくことが肝心です。避難所となった学校もそうですが、直前や当日になってからでは間に合いません。今一度、自助、共助、公助を理解し、意識して防災への備えをしていきたいものです。

「自助」・・・自分(家族)の命は、自分(家族)で守る。

「共助」・・・自分たち(地域・グループ)の命は自分たち(地域・グループ)で守る。

「公助」・・・自治体や消防、警察が守る。

※こうしたつながりの大切さを発信することも学校の使命だと考えています。

我が子に寄り添えていますか？

日々子供達と接している私たち教職員。職員室では毎日いろんな子供達の名前や言動が話題になります。そんな中でよく「子供に寄り添う」という表現を用いることがありますが、なんとなく分かるような、分からないような言葉です。

子育ての基本は、できていること、がんばっていることにフォーカスして認め、褒めて伸ばすこと。なのにできないこと、頑張っていないこと、駄目なこと、その表面ばかりに目が向いてしまい、叱られたり、指示されたりばかりでは、子供の自尊感情や自己肯定感は低くなってしまいます。

「子供に寄り添うこと」とは、子供のよい部分はもちろん、よくない部分も受け入れ認めること、つまりは、子供の全てをまずは無条件に受け入れることだと思っています。大人でも長所、短所があるように、子供にだってそうです。大人が自分のそういう部分はさて置いて、子供の弱点ばかりを責めることはどうなのでしょう。

とはいえ、そもそも意欲さえ見せず、だらだらしている我が子を観ていると、頭では分かっているけれど親の責任感、使命感が勝って、感情的に怒ってしまうこともあります。

要は、子育てしながら大人自身も振り返ること、顧みることが大切なのです。「感情的に怒ってしまったな」と思えば、「さっきはごめんね、きつく言い過ぎたね」と言って抱きしめてあげればいいし、子供が宿題が解けずに困っていたら「一緒に考えようか」「ここが分からないだね」と言葉を掛けてあげればいいのです。子供に寄り添うこととは、子供を正面から見るのではなく、子供の横に座って同じ目線で同じ立場に立つことを意味するのだと私は思います。確かに忙しく疲れている大人からしてみれば、そんな余裕があるわけがない、と言われそうですが、ここが子育ての肝だということをお伝えしようと思いました。

目を見て、子供の気持ちに寄り添ってあげましょう。親の声の掛け方だけで、子供は必ず変わります。

学校本来、楽しいところじゃないんです。 楽しいところにするところなんです。 そこに「学び」があります。

学校と社会の接続を意識した学校の在り方が今、求められています。つまりは、学校を出た子供達がいざ社会へ出て就労できない若者(ニート;若年無業者)を増やしている現実があります。こうした背景から国は「キャリア教育」という概念の元、自身の将来を見通し、職業観、勤労観を育てていくことの重要性を学校現場に求めています。

親も子供も、学校は楽しいはず、みんなが仲良くいつも笑顔があふれている・・・、と考えています。しかし、発展途上の子供達、しかも6年の幅がある集団です。毎日平穩無事で何もなければありません。でも勘違いしないでください。もちろん、心が温まる出来事、涙が出るほど感動する瞬間もたくさんあります。

私が言いたいことは、学校は、いずれは社会へ出て行った際に、自分で考えて、周囲の力も借りながら、たくましく生き抜いていく力を育てるところだということです。社会では通用しないことが学校で通用すれば、社会へ出た子供はそのギャップに困惑します。その結果が社会で働けない若者になっていくのです。ある大学教授は、「学校は納税者を育てるところだ」と言われます。働くことで社会人として世に貢献し、その対価として収入を得て、その収入の中から税を納める・・・そう考えれば確かにその通りだと思えます。

上段の話と重なる部分ですが、毎日子供達は子供達なりの世界で、様々な人生経験を積んで下校していきます。嬉しいこともあるでしょう。反対に辛くて悲しい経験もあるはずです。そんな毎日の中で、子供達は社会に出るための大切な「学び」を繰り返しています。ですから、帰宅後の子供達に寄り添う家庭であってほしい、そんな役割を家庭は担っているのだと私は思います。